福井県ふるさと文学館報
ふる文ニュースレター
第2号

開館一周年を迎えて

館長　西澤　弘純

ふるさと文学館は平成二十七年二月一日にオープンし、早や一周年を迎えました。これまで、荒川洋治先生をはじめ福井ゆかりの作家や、資料をご寄贈いただいた方々など、多くの皆様にご支援、ご協力をいただき、津村節子特別館長とともに改めてお礼申し上げます。

おかげさまで、県内外から延べ十万人を超える方に来館いただき、また展示に対してあたたかいお言葉を多数頂戴し、誠にありがたく思っております。この間、開館記念特別展の「津村節子と吉村昭　果てなき旅～夫婦作家の軌跡～」にはじまり、夏季展「宇宙のものがたり～かこさとしとめぐる旅～」、高見順没後五十年特別展「昭和から未来へのメッセージ」、そして現在開催中の松尾芭蕉×俵万智の「新・おくのほそ道」展と、様々なジャンルでそれぞれ充実した企画展を開催し、福井の文学の魅力を広く伝えることができました。

加えて、展示だけでなく、著名な作家、研究者による講演会や文学講座、企画展に関連した映画上映会や朗読会など、見て、聞いて、楽しみ、学べる企画も数多く開催し、文学に対する関心を高め、理解を深めていただけたと思っております。

また、七月に若い世代の文芸創作を活発にするため、「ふくい文学ゼミ」を開講しました。二十八名の受講生が大手文芸出版社の編集者から約八ヶ月間指導を受け、切磋琢磨しました。将来、この中から文学新人賞の受賞者が出ることを期待しております。

今後も当館では福井ゆかりの作家の資料を収集、保存、展示するとともに、さまざまなイベントを開催して、文学に親しむ機会を提供していきたいと思っておりますので、皆様のなお一層のご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

開館一周年記念角田光代氏講演会

二月七日(日)、開館一周年を記念して、作家の角田光代さんをお招きし、講演会「角田光代が語る『創作の内側』」を開催しました。

旧知の編集者である上田恭弘氏を聞き手に、デビューまでの道のりや執筆スタイル、趣味、最新刊に込めた思いなどをお話しいただきました。

角田さんは、小学校一、二年生の時に作家になろうと決心し、以後ひたすらそのための努力を続けたそうです。また、デビュー当時のバックパッカーの経験が執筆に大きく関わっており、旅が社会との接点でもあったと振り返りました。現在の趣味はランニングやボクシングとのことですが、「実は何が楽しくて続けているのかわからない」と会場の笑いも誘いました。

「平日の九時から五時まできっちり仕事場で書く」というサラリーマンのような執筆生活にも触れ、現在は連載をすべてストップして源氏物語の新訳に取り組んでいることを話されました。

平成二十七年度の教育普及事業

今年度開催した主なイベントについてご紹介します

○創作活動支援事業
ふくい文学ゼミ

小説の書き方を学ぶ「ふくい文学ゼミ」を開講しました。新潮社文芸編集者の上田恭弘氏を講師に迎え、十代から四十代までの受講生二十八名が参加し、文章を書くための基本を学ぶ講義や決められたテーマに基づき小説を書く演習を行いました。また、現役で活躍する作家の万城目学氏、および角田光代氏による特別講義も行い、執筆の秘訣を学ぶ機会もありました。

初回の講義では、常に読者がいることを忘れずに、作品を最後まで書き終えること、書くことの優先順位を上げることなど、作家を目指す者にとって大切な心構えを学びました。

二回目以降の講義では、切り口を意識する、時間、場所、登場人物を欲張らないといった短篇小説の留意点や、括弧の使い方など基本的な表記の方法、キャラクターの作り方など、より専門的な内容を具体例を参考にしながら学んでいきました。

ストーリーに関する講義では、細部を描くことがオリジナリティにつながるということ、視点の講義では、どの視点で書くことが読者に最も効果的かをよく考えることなど、実践的な創作のコツも教わっていました。

受講生の作品の合評会も行い、講師や他の受講生から作品に関する疑問やアドバイスが出され、レベルの高い議論が交わされていました。県内外の文学賞で入賞や候補に残る作品も出ており、ゼミの課題作品も、回を重ねるごとにレベルが上がっています。

参加者の声

・どうしたら上手くなるのだろうと自問自答させられて、とても刺激を受けます。

・先生が書くことへのモチベーションを上手くあげてくださるので、やる気を充電して帰ることができます。

・つたないながらも提出作品を書き上げ、それを合評していただくことで、未熟な点や改善すると良い点などが分かり、ためになります。

明日使える文章術　入門講座

新聞記者、エッセイスト、翻訳家といったさまざまな文筆業の方から読み易い文章作成のコツや意図が伝わる文章の書き方を学び、仕事や創作活動に生かしていただく文章講座を全三回開催しました。テーマを決めて書くこと、構成に配慮し何度も推敲すること、声に出して読んでみること、普段から心の動きを文章にする訓練をしておくことなど、伝わる文章を書くためのポイントを学びました。

○講演会等

日本文藝家協会シンポジウム「文学館の現在と将来」

六月二十七日(土)、日本文藝家協会との共催により、シンポジウムを県立図書館多目的ホールにおいて開催しました。

パネリストに今川英子氏(北九州市立文学館長)、椎名誠氏(作家)、辻原登氏(作家、神奈川近代文学館長)を迎え、関川夏央氏(作家)が進行役となり、文学館の活動や課題などについて議論を交わしました。文学館の活動について、椎名氏は作家を目指す若者が未来を描けるようなアクティブな仕組みが必要であること、今川氏は地域の文学者を掘り起こす役割と地域文化の振興への貢献について話されました。また辻原氏は、作家のスタイルが分かる自筆原稿を展示することの重要性について、関川氏は、文学館では分野にとらわれず、純文学以外にも幅広く文学を紹介することが大切であると述べられました。

また、シンポジウムの後には、カフェテリアで一般の参加者との懇親会を開催し、パネリストと和やかに会話するなど作家を身近に感じるひとときとなりました。

万城目学氏講演会

「万城目学が語る作家のお仕事あれこれ」

十一月八日(日)、作家の万城目学氏をお招きし、講演会を開催しました。編集者を聞き手に、大学時代に訪れた福井の思い出から始まり、作家になるまでのこと、また作家の日常生活や作品の裏話などをユーモアたっぷりに話されました。

魅力的なキャラクターや突飛な設定がユニークなことで知られる万城目氏の作品ですが、ご自身は「キャラクターが勝手に動き出したり、途中から話が生み出されていったりすることはなく、あらかじめ決めた筋に沿って話を進めていくために将棋の駒を一手一手進めるような作業」との苦労も語られ、万城目ワールドといわれる独特な作品世界が生まれる一端を知ることができました。

作家等の出前授業

若い世代に読書や文芸創作に親しんでもらうため、県内高校において「出前文芸創作教室」および「オーサートーク」を行いました。

十二月十五、十六日のオーサートークでは、福井の高校生を主人公にしたスポーツ小説『2．43』の作者壁井ユカコ氏が北陸高校と高志高校を訪れ、「好きを仕事にすること」をテーマに、取材へのこだわりや次作への思いなどを語りました。

また、「好きなことを仕事にして生きていくために、大切なことは何か」という質問に対して、「いつも周りにアンテナを張って情報を集めること」とアドバイスを送りました。

文学カフェ

福井ゆかりの作家やその作品に造詣の深い方などからお話を聞き、質問など交流できる文学カフェを開催しました。

第一回は福井市在住の作家、宮下奈都さんを迎え、自らの作品『よろこびの歌』を書いた動機や背景を話していただきました。また、参加者がグループになり、好きな登場人物や章について感想などを話し合いました。

宮下さんは、物語は自分の中にあるが、読者にわかってもらうように書こうとしても書き起こせないもどかしさや難しさがあること、また、連載から単行本にする際、後に直木賞候補作となった最新作『羊と鋼の森』では手直しに何か月もかかったことなどを話されました。

グループで談話する場面では、宮下さんもいくつかのテーブルに加わり、参加者と交流されるなど、和やかな雰囲気で文学に親しむことのできる機会となりました。

作家を語る・文学講座

福井ゆかりの作家と交流のあった方などからお話を聞く「作家を語る」や、専門的な話を聞いて文学への理解を深める「文学講座」を開催しました。十月三十一日(土)には、高見順および秋子夫人と親交があった高見順文学振興会事務局の川島かほる氏を迎え、高見夫妻についてお話しいただきました。高見順賞創設のきっかけや秋子夫人が高見順の草稿を清書していた話などをされ、参加者からは、「貴重な話が聞けてよかった」「作品を読みたくなった」という感想が寄せられました。

第二回　福井県高校生ビブリオバトル

十一月八日(日)に、好きな本の魅力を自分の言葉で紹介する福井県高校生ビブリオバトルを開催しました。第二回となる今回は東京で開催される本大会への出場権をめぐって熱戦が繰り広げられました。チャンプ本を紹介した谷口さんは、「一度目と二度目で全く違った話に思える魔法のような本」とその魅力を表現し、来場者の気持ちを引きつけました。

○最優秀賞(チャンプ本)
藤島高校一年　谷口朋さん
『ぼくは明日、昨日のきみとデートする』
(七月隆文著/宝島社)

○優秀賞(準チャンプ本)
武生東高校二年　小林知可さん
『誕生日を知らない女の子』
(黒川祥子著/集英社)

映画上映会「昭和文学キネマ」

日本近代文学館「近代文学の名作・昭和」展にちなみ、昭和の文学作品を原作とした映画の上映会「昭和文学キネマ」を開催しました。参加者からは、「近代文学の名作をもう一度鑑賞できてよかった」「今後もテーマを変えて続けてほしい」などの感想が寄せられ、近代文学への関心の高さをうかがうことができました。

平成27年度に開催したイベント一覧

期　間	イベント名	場　所	期　間	イベント名	場　所
4/25(土)	文学講座(中島道子氏)	研修室	11/8(日)	第2回福井県高校生ビブリオバトル	多目的ホールほか
4/26(日)	こいのぼり短歌募集	中庭	11/8(日)	万城目学氏講演会	多目的ホール
5/23(土)	作家を語る(坂本満津夫氏)	坂井市立三国図書館	11/14(土)	昭和文学キネマ　『古都』	映像コーナー
5/24(日)	まめほんワークショップ(若井将代氏)	研修室	11/21(土)	昭和文学キネマ　『五番町夕霧楼』	映像コーナー
5/30(土)	文学サロン(梨屋アリエ氏)	多目的ホール	11/28(土)	文学カフェ③(武藤政彦氏)	研修室
6/14(日)	俳句創作講座(加畑霜子氏)	映像コーナー・園庭	12/6(日)	荒川洋治氏講演会	多目的ホール
6/27(土)	シンポジウム「文学館の現在と将来」(関川夏央氏・辻原登氏・椎名誠氏・今川英子氏)	多目的ホール	12/11(金)	出前文芸創作教室(加畑霜子氏)	坂井高校
7/12(日)	句会(加畑霜子氏)	研修室	12/11(金)	出前文芸創作教室(笠原仙一氏)	足羽高校
7/18(土)	第1回ふくい文学ゼミ	研修室	12/13(日)	昭和文学キネマ　『紀ノ川』	映像コーナー
7/20(月・祝)	藤嶋昭氏講演会	多目的ホール	12/15(火)	オーサートーク(佐藤多佳子氏)	武生商業高校
7/25(土)	文章講座①(山下裕己氏)	研修室	12/15(火)	オーサートーク(壁井ユカコ氏)	北陸高校
7/28(火)	出前文芸創作教室(加畑霜子氏)	武生東高校	12/16(水)	オーサートーク(佐藤多佳子氏)	若狭高校
8/9(日)	かこさとし幻灯上映会(鷲谷花氏)	多目的ホール	12/16(水)	オーサートーク(壁井ユカコ氏)	高志高校
8/22(土)	クラチタランプ作り(クラチタプロジェクト)	多目的ホール	12/19(土)	第4回ふくい文学ゼミ	研修室
8/29(土)	第2回ふくい文学ゼミ	研修室	1/10(日)	昭和文学キネマ　『燃えよ剣』	映像コーナー
9/13(日)	文章講座②(増永迪男氏)	研修室	1/16(土)	文章講座③(鈴木恵氏)	研修室
9/16(水)	出前文芸創作教室(山下裕己氏)	武生商業高校	2/6(土)	第5回ふくい文学ゼミ	研修室
9/16(水)	出前文芸創作教室(増永迪男氏)	仁愛女子高校	2/7(日)	角田光代氏講演会	多目的ホール
9/22(火・祝)	昔遊びにチャレンジ(奥谷崇氏)	多目的ホール	2/13(土)	文学カフェ④(小山鉄郎氏)	研修室
9/27(日)	文学カフェ①(宮下奈都氏)	研修室	2/21(日)	ふるさと文学キネマ『男はつらいよ　寅次郎サラダ記念日』	映像コーナー
10/3(土)	かこさとし武生文学散歩	越前市	2/28(日)	佐藤勝明氏講演会	多目的ホール
10/12(月・祝)	文学カフェ②(中内亮玄氏)	研修室	3/6(日)	第19回ふくい風花随筆文学賞授賞式 阿刀田高氏講演会	多目的ホール
10/31(土)	第3回ふくい文学ゼミ	研修室	3/19(土)	ふるさと文学キネマ『冬の日』	映像コーナー
10/31(土)	作家を語る(川島かほる氏・上出純宏氏)	映像コーナー	3/20(日)	短歌入門講座(市村善郎氏)	研修室
11/7(土)	文学講座(木村小夜氏)	研修室			

平成二十七年度の企画展

高見順没後五十年特別展「昭和から未来へのメッセージ」

会期　平成二十七年十月三十一日(土)～平成二十八年一月十七日(日)

高見順は明治四十年、福井県三国町(現、坂井市)に生まれ、小説、詩、日記、評論など様々な分野で活躍した作家です。戦中、戦後の昭和時代に生きた人々を自己と向き合いながら生涯にわたって描き続けました。

本展では、高見順の数十点に及ぶスケッチ、闘病で意識が朦朧とするなか記した最後の日記、故郷三国の海を詠った「荒磯」の詩稿の他、太宰治、林芙美子、三島由紀夫らが高見順に宛てた肉筆の手紙など約二百点の資料を展示し、高見順ならびに昭和を代表する文人たちの足跡を辿り、激動の昭和という時代とそこに生きた人々の姿を紹介しました。

高見順は戦争中に「生きるといふことはどんなに貴重か」、病床で「書くといふことはどんなに貴重か」と強く感じ、「文学者の運命は書くといふことである。書くことは生きることである」と考え、死の恐怖が心に迫ったときも、創作を続けました。

詩「電車の窓の外は」では、光と喜びに満ちたこの世と別れなければならない自分を悲しむのではなく、生命の輝きを喜

び、「安心だ 君たちがいれば大丈夫だ さようなら あとを頼むぜ じゃ元気でー」と末来へ向けたエールを送っています。

観覧された方からは、「文学史の中での重要性が再認識できた」「人間としての高見順を感じることができた」「高見順の作品を読んでみたい」といった声が寄せられました。

また、日本近代文学館「近代文学の名作・昭和」展を同時開催。小林多喜二、太宰治、宮沢賢治、林芙美子など、昭和を代表する作家の原稿で、昭和の文学史を辿りました。あわせて「ちまちま人形展」も開催し、高山美香氏制作の十五センチの文人たち(二十三体)と、作家の豆知識がいっぱいのユニークなイラストエッセイが好評でした。

荒川洋治氏講演会「高見順―著作の風景」

十二月六日(日)、高見順没後五十年特別展の記念講演として、現代詩作家・荒川洋治氏の講演会を開催しました。

荒川氏は、今回のふるさと文学館の展示で初めて高見順の肉声を聞いたと述べ、「明快でわかりやすい話し方であり、頭のいい作家であることがわかる」「高見順は、自分から遠い人でも同じ目線でとらえ、公平に作品に取り入れる姿勢を貫いた作家であり、決して上から見ず、平地を歩いたところが同時期のその他の作家との大きな違いである」と話されました。文学者たちがそれまでになかった言葉を作ったことにも触れ、高見順が「慕情」という言葉を作ったことを紹介。『如何なる星の下に』などのように、日本の現代小説の題に詩歌のことばを使うようになったのも高見順からだそうです。また、高見順が生涯書き続けた日記は、簡潔な文章でありながら、中に社会的な空気を閉じ込めているところがすばらしい点であると語りました。

昨今の大学の人文系学部が整理されている流れについても触れ、文学はすぐに役立つわけではないかもしれないが、人間の想像力、思考力を育むのに役立つ実学であることを強調し、「本がたくさん読まれる時代には、流行のものが主流となり、大切なことが外される傾向にある。読書には不幸な時代ともいえるが、若い人が文学を読むことにより、世の中を変えていく力になる」と締めくくりました。

参加者の声

- 広く文学を学んでいきたいと思った。高見順の作品をすぐにも読みたくなった。
- 自分の知らないことばかりで、大変おもしろく聞かせてもらった。
- 荒川さんのお話の巧みさ、おもしろさに感服した。
- 話が深く、今の時代への継承も改めて考えさせられ、文学についてなお一層興味がわいた。

「宇宙のものがたり～かこさとしとめぐる旅～」

会期　平成二十七年七月十八日(土)～十月十二日(月・祝)

一九二六年に武生(現・越前市)に生まれたかこさとしさんは、現在までに六百を超える作品を書いており、子どもたちにも人気の作家です。

『地球』『宇宙』『人間』など、子どもたちが自分で考え、判断できる人間になれることを願って描かれた科学絵本をはじめ、子どもたちの姿を映し込んだ人気作品『だるまちゃんとてんぐちゃん』『からすのパンやさん』などの原画(複製)や『伝承遊び考』の執筆資料、愛用品等を展示し、かこ作品の魅力を紹介しました。

からすのパンやさんファミリーのフィギュアと写真撮影ができるコーナーも大人気でした。

また、かこさんの絵本を題材にしたオリジナルのお弁当(キャラ弁)コンテストを行い、県内外から二十九作品の応募がありました。来館者の皆さんによる投票の結果、野坂夏代さん(新潟県上越市)が最優秀賞に選ばれました。

松尾芭蕉×俵万智の「新・おくのほそ道」展

会期　平成二十八年二月十三日(土)～四月十日(日)

福井を訪れた俳人・松尾芭蕉と福井ゆかりの現代歌人・俵万智さんの作品を取り上げ、古典と現代文学を対比しながら短詩の魅力を、二人の旅にまつわる関連資料とともに紹介しました。

松尾芭蕉が『おくのほそ道』の旅で敦賀を訪れた時に詠んだ「月清し」の句の自筆短冊や、俵万智さんが中国を訪れた際のエッセイ自筆原稿のほか、それぞれの句・短歌と写真を合わせ、視覚でも楽しめる展示を行いました。

風のうた～ふる文コレクション展

会期　平成二十七年四月十八日(土)～六月二十八日(日)

舞い上がる風のように生き、ふるさとの風土をうたい、文学の風を世に送りつづけた福井ゆかりの短詩型文学の作家にスポットをあてた館蔵品展を開催しました。

森田愛子、山川登美子、中野鈴子の三人の女性作家、山本和夫、皆吉爽雨、吉田正俊、岡部文夫などふるさとの風土を謳った作家たち、則武三雄と彼の主宰した北荘文庫から世に出た作家たち(広部英一、岡崎純、南信雄、川上明日夫など)を紹介、則武三雄の愛用品も展示しました。

寄贈受贈

○お知らせ

資料寄贈のお願い

文学館では、福井の文学に関する資料を収集・保存し、次の世代に継承するとともに展示などで活用しています。福井ゆかりの作家や作品に関する資料(自筆原稿、書簡、書画、挿絵、愛用品等)がございましたら、文学館までご寄贈いただければ幸いです。

寄贈受贈

平成二十七年度に自筆資料等を寄贈された方を紹介します。ご寄贈ありがとうございました。

佐倉瑞穂様、(公財)高見順文学振興会、司修様、廣部恭子様、藤野恵美様、牧田正太郎様、森田正昭様、吉川道江様、渡辺喜一郎様(五十音順)

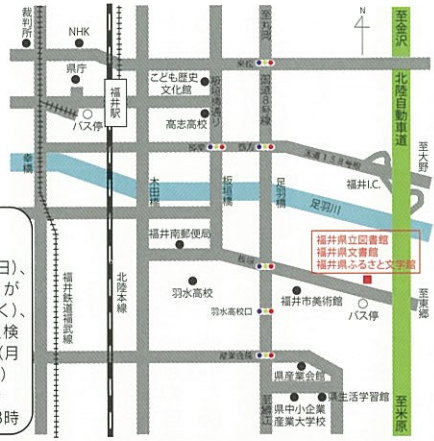
ふるさと文学館ホームページ・フェイスブック

文学館では、ホームページやフェイスブックでも展示、イベントなどの情報を発信しています。展示更新や文学館のイベント最新情報などをいち早く知ることができます。ホームページでは過去の企画展やイベント報告、福井ゆかりの作家や作品など福井ゆかりの文学に関する情報も掲載しています。フェイスブックの職員のつぶやきなどもぜひチェックしてみてください。

編集後記

「ふるさと文学館ニュース」を縮めて名付けた館報「ふる文(ぶん)ニュース」。今回の第二号では、平成二十七年度に開催してきたイベントを中心にお届けしました。この一年を振り返ってみて、福井ゆかりの作家や作品、創作活動など県民の皆様が文学に親しむ機会を少なからず提供でき、微力ながらふるさと文学の振興に役立つことができたのではないかと感じています。資料の収集、保存、展示などの活動も含めて、今後もますます福井の文学の魅力を発信することに努めたいと思います。

ふるさと文学館へはフレンドリーバス(無料)が便利です。
福井駅東口発
(所要時間約15分、30分間隔で運行)


裁判所
NHK
県庁
福井駅
バス停
こども歴史文化館
高志高校
至金沢
北陸自動車道
至大野
福井I.C.
足羽川
足羽橋
木田橋
振橋橋
福井南郵便局
福井県立図書館
福井県文書館
福井県ふるさと文学館
羽水高校
羽水高校口
福井市美術館
バス停
至東郷
至米原
県産業会館
県生活学習館
県中小企業産業大学校
福井鉄道福武線
北陸本線
至福井
至田原町
至足羽山公園
至福井駅
至木田橋
至足羽橋
至高志高校
至こども歴史文化館
至福井駅
至福井駅
至福井駅